

現代都立高校生の将来観と社会観

——私立高校生との比較から——

平木 耕平（東京大学大学院教育学研究科修士課程）

■要約

- ◎都立高校生は、家庭階層の低い生徒ほど経済的な地位達成志向が強い。このような関係は、私立高校生にはみられない。
- ◎都立高校生は、努力すれば裕福になれるという社会観をもつ生徒ほど、裕福になりたいという願望も強い。これより地位達成への努力が正当化されることが期待される。一方、経済的に恵まれているであろう私立高校の内部進学者の場合、このような努力に関する社会観と経済的地位達成との間に関連はみられない。
- ◎都立高校生は、出身階層の低い層で努力を正当化し、自分自身も経済的に地位達成を志向する傾向がみられ、逆に高い層では、努力すれば裕福になれるという社会観を信じながらも、地位達成志向は強くない。これらの関係は私立高校生ではみられず、チャンスの開放的な社会形成をめざすために、都立高校生の社会観は重要な意味をもちうる。

1 はじめに

本章では、昨今問題となっている経済的な「格差」を念頭におきながら、現代の都立高校生が抱く将来への意識と社会認識について、都内の私立高校生との比較を交えて分析する。ここから、次世代を担う若者たちの社会観と、その醸成のしくみについて検討を試みたい。

私立高校と比較しての公立、特に、東京都立高校に注目することには、現代的な理由がある。

1990年代以後、日本でもネオリベリズム的な思潮の影響を受け、私的・個人的な利益をもたらすものとして教育達成を追求する動きが加速している。教育の成果は個人に帰するものであるから、学校選択制に典型的にみられるように、個人や家庭がそれぞれのニー

ズに見合った教育を選択すべきであり、その責任も個人にあるといった考え方である。このような見方の背後には、教育の私事化・市場化を承認し推進する見方が含まれている。

他方で、東京都を中心とする大都市圏では、Bright-Flight (Kariya and Rosenbaum 1999) ないしリッチフライト (藤田 2006) と呼ばれる、公立学校からの逃避が大きな流れとなっている。こうした動き、特に私立中高一貫校への進学は、親が我が子に「難関大学」への進学を有利にするための教育環境を用意しようとする学校選択の一種であり、教育の私事化・市場化の一端を示している。さらに、私立校への進学は、学力水準の面のみならず、学費負担能力という面からみた出身階層の面でも差異がある。こうして、私立中高一貫校→難関大学→高い社会経済的地位、という有利な機会の連鎖に連なることから、近年拡大

しつつあるといわれる格差と、その世代間再生産の問題ともかかわっている。

これらの問題は、私立の中高一貫校の偏在する都市部、なかでも東京都においてもっとも顕著に表れると考えられる。他方、比較的人口規模の小さい地方では、伝統的に私立と比べて公立高校を優位とする風潮があり、このような対比はみられにくいと思われる。ゆえに、東京都における実態を知ることが重要なのである。

大都市圏（東京都）での私立志向が教育の私事化・市場化の一端を示しているとすれば、都立高校は、教育の私事化の進行とは異なる社会認識の形成に一定の役割を果たしているのか、それとも、公立と私立とを問わずに、自己責任に基づく私的な利益を求める意識が広まっているのか。本章では、こうした都立高校生の特色をふまえ、都内の私立高校生のデータと比べながら、生徒の将来観や社会観についての分析を行う。教育の機会と受益をとおして、自己責任や個人的な自己実現だけにとどまらない、社会的広がりを持った将来意識が形成されているかどうかを探るのである。

なお、東京大学教育学部比較教育社会学コースでは、このたびの都立高校生調査とは別に、2006年度の教育社会学調査実習の一環として、都内の私立高校17校¹を対象とした質問紙調査を実施している（以下、「私立調査」と略）。私立調査は、2006年10月下旬から12月にかけて行われ、今回と同じ高校2年生、1,856名から回答を得ることができた。本章では以下、このデータを併せて用いることにする。

2 分析

2.1 都立／私立高校生の家庭背景

まず、本格的な分析に入る前に、今回の分析対象である都立高校生と私立高校生が、どのような特徴をもつかみておこう。

前節で述べてきたように、首都圏の私立高校、とりわけ一部の中高一貫校には、恵まれ

た家庭環境の子どもが集まるとされる。これは、言いかえれば、家庭の階層という点からみて非常に均質性の高い学校空間であるといえる。他方、都立高校は、学校ごとに差はあるものの、公教育の観点から、多様な生徒たちの受け皿としての機能が求められる。

たとえば、家庭の階層的背景を示す例として、父親の学歴が大卒以上（「四年制大学」「大学院」）の生徒の割合をみてみよう（Q51A）。図1-1より、都立高校生では4割程度であるのに対して、私立高校では8割近い生徒の父親が大卒以上であることがわかる。現在でも大学進学率は5割程度であることから、私立調査の数値は非常に高いといえよう。彼／彼女らの親世代の大学進学率から考えて、都立高校生の家庭背景は一般的な社会像に近いが、私立高校ではそれとは異なる、高い階層出身の生徒が集まったきわめて均質な空間が存在していることになる。これは私学を選択する保護者にとっては大きなメリットの1つであり、特に、中高一貫の私立校に中学校段階から入学した生徒²は、公立中学校（ほとんどの場合）を経験することなく、その社会認識の空間はさらに均質化されたものとなっているはずである。

都立高校のように一般社会に近い空間と、一部の私立高校にみられる「均質的」な空間は、異なった将来観・社会観を醸成する可能性が高い。はたして、そこで都立高校生に期待されることは何であろうか。次項では、都

-
- 1 これらの調査対象校については、2007年度版受験ガイドを参照し、東京都の私立高校を「入試難易度」（3分類）、「共学校／男子校／女子校」、「大学附属校か否か」という3つの指標に基づいて18の категорияに分類し、また所在地や宗教教育、併設の大学など他の特徴において偏りが生じないように考慮しながら選定した。特に、1つのカテゴリーにあてはまる学校数が多い場合には、複数の高校で調査を実施することを心がけた。「分析にあたって」（p.7）も参照。
 - 2 本稿では以下、私立中高一貫校において中学校から内部進学してきた生徒を「中入生」、他中学校から受験して入学してきた生徒（高校募集がある学校に限られる）を「高入生」として区別することにする。

図 1-1 父親の学歴分布³

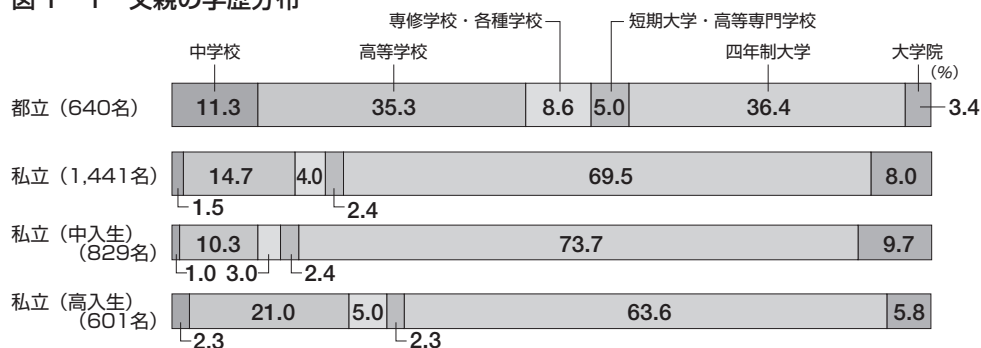
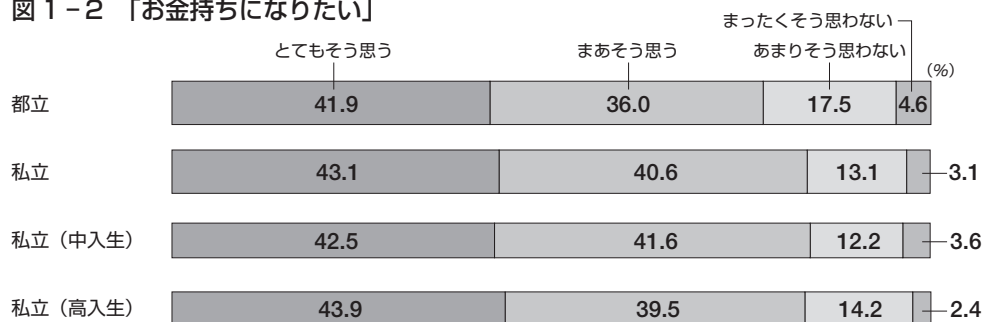


図 1-2 「お金持ちになりたい」



立／私立高校生の「お金持ちになりたい」という将来観に着目して、現代の高校生像をさらに掘り下げてみたい。

2.2 都立／私立高校生の将来観

本調査と2006年の私立調査では、自分自身や社会に対する意識項目として、いくつかの同じ質問が用意されている。そのうち、Q45 F「お金持ちになりたい」という項目への回答について、都立と私立の間で比較・検討を試みる。

図1-2をみると、全体として8割前後の生徒が「とてもそう思う」あるいは「まあそう思う」と回答している。しかし、その割合が都立77.9%であるのに対して、私立では83.7%（うち中入生では84.1%）となっている⁴。

これまで述べてきたように、都立高校生は、私立高校生と比べて経済的に恵まれない家庭を出自とする可能性が相対的に高い。もちろん、「お金持ちになりたい」と望んでいる生

徒全員が、実際に裕福になれるわけではない。しかし、そもそも不利な立場にいる側のほうが最初からあきらめやすいとすれば、経済的な格差は拡大し続けることになるだろう。そこで、どのような生徒が「お金持ちになりたい」と回答しているのか、そこに「あきらめ」のメカニズムははたらいっていないか、もう少し詳しく分析する必要がある。

なお、この質問項目はもともと肯定側に回答しやすいことが他の調査でもわかっており、図1-2で確認したように分布も偏っている。したがって、以下、そのなかでも「とてもそう思う」と答えた生徒の割合に注目して話をすすめることにする。

2.3 誰が「お金持ちになりたい」のか？

さらに、都立（私立）高校生のなかでも、どのような属性の生徒が「お金持ちになりたい」と思うのだろうか。ここでは、図1-1でみた家庭階層、特に父親の学歴に注目する。

表 1-1 「お金持ちになりたい」×「父親学歴」

			お金持ちになりたい		合計	N
			とてもそう思う	その他		
都立	父親学歴	大卒以上 (%)	38.2	61.8	100.0	254
		大卒未満 (%)	45.3	54.7	100.0	381
		合計 (%)	42.5	57.5	100.0	635
	10%水準で有意 p=0.080					
私立	父親学歴	大卒以上 (%)	42.7	57.3	100.0	1,112
		大卒未満 (%)	46.7	53.3	100.0	323
		合計 (%)	43.6	56.4	100.0	1,435
	有意差なし p=0.198					
中入生	父親学歴	大卒以上 (%)	42.4	57.6	100.0	689
		大卒未満 (%)	44.2	55.8	100.0	138
		合計 (%)	42.7	57.3	100.0	827
	有意差なし p=0.693					
高入生	父親学歴	大卒以上 (%)	43.1	56.9	100.0	415
		大卒未満 (%)	48.4	51.6	100.0	182
		合計 (%)	44.7	55.3	100.0	597
	有意差なし p=0.238					

表 1-1 のように、都立高校生では、父親が大卒未満である生徒に比べて、大卒以上の生徒ほど肯定的に答える割合が少ない（「大卒以上」38.2% < 「大卒未満」45.3%）。この差は統計的にも10%水準で有意である。一方で、私立高校生では、父親の学歴にかかわらず、大卒以上と大卒未満で、統計的に有意な差はみられない。図 1-2 の「お金持ちになりたい」について「とてもそう思う」と回答する割合は都立・私立いずれも40%台前半でさほど変わらないにもかかわらず、内部でこのような異同が生じるのは興味深い。さらに、私立を中入生と高入生に分けて考えた場合、中入生では父親の学歴による意識の差がもっとも小さく、他方、高入生はどちらかといえば都立に近い傾向を示している（ただし、有意差はない）。

すなわち、都立高校生では、家庭背景から考えてあまり恵まれていない層ほど、「お金持ちになりたい」という野心をもっている。

これを一種の社会的上昇志向ととらえれば、格差社会に対抗する駆動力をもちうるかもしれない。他方、私立高校生では出身階層の高低と経済的なアスピレーションの間に関連性がみられず、特に中学受験により入学した中入生において顕著である。もともと豊かな層が「金持ちけんかせず」というような余裕をみせているとも考えられるが、現在の境遇をあたりまえだと思っていたり、同時に、早期選抜による「あきらめ」「燃えつき」が生じたりしているとすれば問題であろう。社会の流動性が薄れ、格差が世代を越えて固定化する危険性をはらんでいるからである。

-
- 都立高校生のサンプル数が全体より少なくなるのは、調査対象校の一部で、学校側の要請により親学歴などに関する質問項目を除外したためである。
 - 都立と私立の間には有意差がある(p=0.000)。ただし、私立の中入生と高入生との間に有意な差はない(p=0.245)。

次項では、このような「努力」と「あきらめ」に着目して、彼／彼女らの現代社会観と関連させながら、さらに深く検討することとしたい。

2.4 努力すれば「お金持ちになれる」？

前述のように、都立高校生と私立高校生の将来観のちがいは、今後の社会形成に影響をおよぼしかねないと思われる。そこで、彼／彼女らが現在の日本社会をどうとらえているか調べてみよう。

これまでの仮説にのっとると、私立高校の中入生の一部には、ある種の「あきらめ」のような空気が存在しているのではなかろうか。一例として、本調査と私立調査に共通して存在する、Q38A「日本は、本人のがんばりしだいでお金持ちになれる社会だ」（以下、「努力すれば裕福になれる」と略）という質問項目の回答結果を図1-3に示す。

意外なことに、都立・私立高校生の間、あるいは私立の中入生・高入生の間で、社会認識に大きな差異は存在しない（ $p=0.163$ ）。これ自体は興味深い結果である。回答も肯定側と否定側で約半数ずつとなっていることから、社会全体でこのとらえ方が混迷していることを示唆している。競争時に不利な立場の者が「努力してもムダだ」とあきらめ、有利な者ほど「努力の結果だ」と自己正当化しやすいのではないかという仮説も考えたが、上

記のように検証されなかった。

そこで、これまでみてきた自己の将来意識といかに結びついているのかを通じて、このような社会観をよりクリアに描き出したい。都立高校生と私立高校生では、表れ方がどのように異なってくるのか。また、家庭階層による意見の差異に対して、いかなる変容を生じさせるのか。本項ではこれらの関係について検討する（以下、「努力すれば裕福になれる」の質問に「とてもそう思う」あるいは「まあそう思う」と回答した生徒を「思う」、「あまりそう思わない」もしくは「まったくそう思わない」と答えた生徒を「思わない」として大別した）。

表1-2にあるように、都立校では「努力すれば裕福になれる」と考えている生徒ほど、「お金持ちになりたい」と思う割合も高い（「思う」44.8% > 「思わない」38.2%、5%水準で有意）。努力の余地があるからこそ「お金持ちになりたい」とも思えるのは納得がいく話である。同様の傾向は私立全体や私立の高入生でもみられ、有意な差がある。ところが、私立の中入生だけはその傾向が弱まり、有意差がみられない。努力することと裕福になることが、必ずしも結びついていないのである。

先ほどから述べているように、私立の中入生のある層は、家庭的に非常に恵まれている。彼／彼女らの富裕さは生まれたときから付帯しており、自分が努力して手に入れたもので

図1-3 「努力すれば裕福になれる」

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
都立	16.6	39.9	32.7	10.7
私立	16.6	38.7	36.3	8.4
私立（中入生）	15.6	40.1	35.7	8.5
私立（高入生）	17.4	37.2	37.0	8.4

はない。また、中学受験という早期選抜の「勝ち組」である彼／彼女らは、この先も相対的に安定した未来（大学附属校であれば大学まで）が保証されている。小学校時代（あるいは幼稚園時代）の受験勉強は大変だったろうと推察するが、そもそも小学生がひとりで受験を思い立つわけではない。早くから「努力」をさせられた経験、そしてその後のエスカレーターに乗った「燃えつき」が、直近の高校受験に向けて「努力」した都立生や私立の高入生との差異となって表れているのではなからうか。

最後に、生まれおちた家庭背景という観点から、表1-1でみた父親の学歴を加えて考えると、どのような関係を示すだろうか。表1-2の基本となるクロス表（「お金持ちになりたい」×「努力すれば裕福になれる」）により、4つの類型が考えられる。それぞれをⅠ～Ⅳ型とし、従属変数として分析を試みた。

表1-3をみていくと、私立ではいずれの категорияでも統計的な有意差がみられないが、都立ではその分布に有意な差（10%水準）がある。

注目すべきは「Ⅱ型」である。「Ⅱ型」とは、「今の日本は努力しだいで裕福になれる社会だと思うが、自分はお金持ちにならなくてよい」というグループである。都立高校では、父親の学歴が高いほど、このグループに入る割合が高くなっている（「大卒以上」37.6%＞「大卒未満」27.7%）。また、「努力すれば裕福になれる社会だと思うし、自分もお金持ちになりたい」という「Ⅰ型」は、父親の学歴が大卒未満の生徒のほうが多い（「大卒以上」23.2%＜「大卒未満」26.6%）。すでに恵まれていると思われる親大卒層があまりガツガツせず、より恵まれていない層が上昇移動を志向すれば、社会的には経済格差は正に対して好循環がはたらくはずである。

表1-2 「お金持ちになりたい」×「努力すれば裕福になれる」

			お金持ちになりたい		合計	N
			とてもそう思う	その他		
都立	努力すれば裕福になれる	思う (%)	44.8	55.2	100.0	839
		思わない (%)	38.2	61.8	100.0	636
		合計 (%)	42.0	58.0	100.0	1,475
5%水準で有意 p=0.011						
私立	努力すれば裕福になれる	思う (%)	45.6	54.4	100.0	1,004
		思わない (%)	39.9	60.1	100.0	815
		合計 (%)	43.0	57.0	100.0	1,819
5%水準で有意 p=0.014						
中入生	努力すれば裕福になれる	思う (%)	44.2	55.8	100.0	547
		思わない (%)	40.5	59.5	100.0	435
		合計 (%)	42.6	57.4	100.0	982
有意差なし p=0.234						
高入生	努力すれば裕福になれる	思う (%)	47.2	52.8	100.0	447
		思わない (%)	39.4	60.6	100.0	373
		合計 (%)	43.7	56.3	100.0	820
5%水準で有意 p=0.025						

表 1-3 「お金持ちになりたい」×「努力すれば裕福になれる」×「父親学歴」

		努力すれば裕福になれる お金持ちになりたい	思う		思わない		合計	N
			とてもそう思う	その他	とてもそう思う	その他		
			I 型	II 型	III 型	IV 型		
都立	父親学歴	大卒以上 (%)	23.2	37.6	15.2	24.0	100.0	250
		大卒未満 (%)	26.6	27.7	18.7	26.9	100.0	379
		合計 (%)	25.3	31.6	17.3	25.8	100.0	629
10%水準で有意 p=0.073								
私立	父親学歴	大卒以上 (%)	25.2	30.6	17.5	26.6	100.0	1,107
		大卒未満 (%)	26.4	28.6	20.2	24.8	100.0	322
		合計 (%)	25.5	30.2	18.1	26.2	100.0	1,429
有意差なし p=0.621								
中入生	父親学歴	大卒以上 (%)	24.5	30.9	18.0	26.6	100.0	685
		大卒未満 (%)	25.4	32.6	18.8	23.2	100.0	138
		合計 (%)	24.7	31.2	18.1	26.0	100.0	823
有意差なし p=0.876								
高入生	父親学歴	大卒以上 (%)	26.3	30.4	16.7	26.6	100.0	414
		大卒未満 (%)	26.5	26.0	21.5	26.0	100.0	181
		合計 (%)	26.4	29.1	18.2	26.4	100.0	595
有意差なし p=0.469								

私立高校（特に中入生）ではこのような顕著なポイント差はみられないことから、このことは様々な出自の生徒が混在する都立高校の、1つのメリットではないかと予想される。

3 考察と結語

これまでみてきたように、都立高校生の将来観と社会観を、私立高校生と対比しながら、特に「裕福になりたいか／努力すればなれるか」という点において検討してきた。これまでの分析をもとに、次のような考察を加えたい。

第一に、将来の経済的な地位達成に関して、公立高校生と私立高校生では意識に相違がある。全般的には公立高校生のほうが「お金持ちになりたい」と思わないのだが、それだけではない。公立高校では、出身階層の低いと思われる生徒ほど「お金持ちになりたい」と思う関係性がみられるが、私立高校では確認

されない。私学に受かったことがすべてなのか、早期選抜の弊害による「燃えつき」か、いずれにしる後は現状維持、諦観といった感じである。

第二に、努力すれば裕福になれるという社会観は、富裕になりたいという自分自身の将来観と深く結びついている。これより、「お金持ちになりたい」という素朴な夢に対して、努力が必要だという認識が喚起され、努力が促されると考えられる。ところが、経済的な出自が豊かであろう私立高校の中入生の場合、親世代の豊かさへの依存なのかどうかはわからないが、このような関連はみられない。階層間格差が固定化することが随所で指摘されているが、このような社会を変革していくうえで、より一般的な社会に近い環境を経験し、直近に高校受験という「努力」によるステップアップを体感してきた都立高校生や私立高校の高入生の社会認識は重要な意味をもつと思われる。

さらに、第三点としてこれまでの関係を整理すると、都立高校生には、父親低学歴層に「努力して豊かになろう」という生徒が多く、父親高学歴層では「努力すれば豊かになれるが、自分がかまわない」として別の自己実現を模索する生徒の存在が確認される。これは私立調査にはみられなかった関係である。その要因まで本分析で明らかにすることはできなかったが、通常想定されるアスピレーションとの因果がみられないのはむしろ不思議で

ある。

都立高校分析のような循環が社会的にうまく機能すれば、誰にもチャンスがめぐってくる本当に「豊か」な社会形成に資することだろう。ただし、残念ながら、スタート地点ですでに「努力」できるかの資源の差がついてしまっている可能性がある。その解決のためにも、様々な可能性を秘めた彼／彼女らがスムーズに社会を担えるよう、周囲の環境が整備されることを期待したい。

<引用文献>

藤田英典、2006、『教育改革のゆくえ——格差社会か共生社会か（岩波ブックレット）』岩波書店。

Kariya, Takehiko and Rosenbaum, James E., 1999, “Bright Flight: Unintended Consequences of Detracking Policy in Japan,” *American Journal of Education*, University of Chicago Press, 107(3):210-30.